

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回は無しです。

解説 (既に存在する言葉について)

1. 心眼…物ごとの本質(本当の姿)を見抜く力。今回、気流を見る力も含みます。

解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. 気流…通常大気の流れを指しますがここでは、人間など生き物が発する気(外気)の流れを指します。

~ 第90章 ~ < 事件処理 >

- 紅龍襲撃事件の翌日 -

龍冴達の行動等により紅龍襲撃事件は間の中に葬る格好が取られた。

通常の捜査が行なわれると、『事が面倒になる』という上の訳の分からない意向が働いたらしい。

しかし、龍冴と運難コンビの独断で、運難コンビを介して国際二課には内密を条件に伝えられた。

そして警護の事も運難コンビが用意した事になった。

そんな事件処理が終わったのは朝方になってからだった。

龍冴達はほとんど徹夜状態だった。

しかしこの襲撃事件は今まで暢気にしていた上を焦られる結果になった。

そして龍冴達に殲滅作戦を急がせる様に指示が下った。

龍冴にとってはこれでも頑張っている方だと文句を言いたいぐらいだった。

これだけ大掛かりな事を短期間でするなら人員を増やすべきだが、隠密に事を済ませたい上層部にそんな事を言っても無意味である。

それを言った所で状況は変わらない。むしろ上層部との関係を悪くなってしまう。龍冴にはそんな気は無かった。

素直に「分かりました。」と返事して連絡を切ると龍冴は時計に目をやった。

時計は朝3時を指していた。

龍冴以外は事件処理が終わるとそそくさと寝てしまっていた。

龍冴はこの中途半端な時間をやり過ごす方法を考えていた。

~ 第91章 ~ < 超越した能力の皮肉 >

龍冴にとっては睡眠は5、6日は取らなくても平気だった。

それどころか通常は睡眠とは体をリラックスさせる良いものだが、龍冴にとっては辛いものである。

(今までの事で龍冴が特別、異常であるのは分かってもらえると思います。

睡眠とは脳の情報整理の時間でもあります。そこでこれまでの情報を残す、消すを前回の睡眠後から今までの情報を整理します。その際に見るものが夢であり、心を安定させる為にあるのです。

しかしこれは整理する情報量が少ないからいいのです。

龍冴の脳は通常20%前後ほどしか使われない脳を、90%以上使える為、通常の記憶以上に細かく鮮明に記憶していて、1度入った情報は消される事がない。その為、龍冴が見る夢というのはその莫大な今までの経験のおさらいの時間のようなものなのです。

経験として整理されている記憶は、悲しい、苦しい、辛いなどの良くない思い出が大半です。

これは皆さんもお分かりだと思います。

(いい思い出よりも辛い思い出の方が鮮明に覚えているという事は。)

龍冴は禍悪主と分離した事によって”暗殺者としての記憶”を持っていない。

龍冴の記憶は途切れ途切れではあるが”青水きなこと”の記憶”が始まりである。

そんな今までの龍冴の記憶の中で、もっとも辛く経験として整理された記憶は”青水の死”である。

それをDVDの映像以上の鮮明さで何度も見せられるのである。

思い出そうとすれば何人も周囲にいた組織の人間一人一人の顔を正確思い出せるのである。

そしてその光景をゆっくりとスローで見る事も出来る。

龍冴の脳はビデオの様に好きな時に記憶を見る事が出来る。しかしこれは幸せな事ではない。

『夢ぐらいは楽しい世界であって欲しい』と人は思う事があるが、龍冴にとっては夢こそ地獄に近いのである。

しかも、短時間で最大の回復を求める龍冴の体は、仮眠のつもりでも深い眠りになってしまう。

龍冴は自分の体を良く知っているので、何もする事が無くても決して眠る事だけは避けるのである。

そして眠らなくて済むのなら龍冴は眠りたくないと常々強く思っている。

龍冴はしばらく考えていると静かに立ち上がると、地下へと下りて行った。

- 地下5階 -

ここは今までストーリーの中には登場しなかった四天王達の個人施設がある階層だった。

プロフェッサーの個人研究室、蒼凱の専用情報室などがある。

その一番奥にありもっとも広い部屋が龍冴の個人施設だった。

その入り口はまるで城門の様に威圧感を持つ巨大な扉だった。

嚴重なセキュリティが施されていた。それを龍冴が外し中へと消えていった。

その背中には扉同様に『入るな』といわんばかりの威圧感があった…。

~ 第92章 ~ < 苦悩 >

- 朝6時 -

龍冴を除く全員がミーティングルームに集まっていた。

凱歌ときなを除く全員が欠伸をしたり眠たそうに目を擦っていた。

凱歌ときなこの二人は眠そうな三人を見ていた。それに蒼凱が気が付いた。

「すいません。朝だというのに欠伸ばかりして。

色々と処理にてこずっていたら朝方になってしましまして。

でも心配は要りませんよ。ちゃんと事件処理は済みましたから。

それにしても龍冴さん、どこに行ったんだろう？」と蒼凱が二人に説明をした。

「最後の通信記録から3時までここに居たはずですが。」と天山がコンピューターを操作しながら言った。

「寝てるとか？」ときなこが何気なく言った。それに対して三人はきっぱりと「無い」と断言した。

その早い返しに凱歌ときなこは驚いた。

そしてプロフェッサーが龍冴の夢について説明した。

「つまりわしらにとってはいいものかもしれないが、龍冴にとっては現実の方が幸せなんじゃ。

寂しい事に…。

たった3時間程度だったら眠ったりはしないんじゃないよ。」と寂しそうにプロフェッサーが教えてくれた。

「随分と暗い雰囲気だな。勝手に俺の事を話したのか？」と扉に寄り掛かる格好で龍冴が言った。

「龍冴…。どこに行っていたんだ？」と天山が訊いた。

「質問に答えていないぞ…。今まで自室で仕事の続きをしてたんだ。」と龍冴が呆れた感じで答えた。

「ちょっと夢の話な。」とプロフェッサーが独り言の様に言った。

「それでか…。そんな哀れむような目で見ろな。

と言っても滅多にそんな目を向けられないから新鮮だけどな。

いつも俺は何でも出来る万能な奴を見るような眼差しはあってもこういうのはなかなか無いからな。」

と自分の苦勞を誤魔化す様に龍冴は笑いながら言った。

それが逆に痛々しく見えてしまった。

少し間が空いて龍冴が続けた。

「第一、生まれてこの方ずっとこんなんだから慣れたよ。

だから俺の事を気に掛ける事は無い。

これも意外と悪くは無い。最後こそ辛いがそれまでは夢の中でアイツに逢えるんだからな。

本当にその場に居るような完璧な感覚だからな。

それよりもしなければならぬ事はまだ沢山ある。

上もそろそろ焦ってきているが所詮上は見ているだけだ。

命の危険があるのは俺達なのだから、万全の準備をし慎重に事を進める必要がある。」と

真面目な顔になり話した。

しかしその龍冴の言葉に目を細める者が居た。

『慣れたですか…。初めてこの話を聞いた時の私は俄かには信じられなかったというより

信じていなかった。

何でも完璧にこなせる、天才という言葉が欲しいままにする私達のリーダーである龍冴がと…。

しかし、プロフェッサーから龍冴の夢と目が覚めたばかりの龍冴の姿を見せてもらって

私は愕然とした…。

あれほど鮮明にもっとも愛しい人の死を何度も見せられれば、気が狂ってもおかしくない。

そしてその夢のせいで冷や汗をだらりと掻き、顔は青ざめ、唇は真っ青になり動揺しきっている

龍冴の姿。

それに耐え、教訓とし、他人の為に全てを尽くす龍冴に改めて尊敬を感じ、リーダーと認めた。

だからこそ、私は龍冴の仲間であり、ライバルであり続けたいと思った。」と天山は自分がこの話を

知った時の事を思い出していた。

プロフェッサーは申し訳無い気持ちでいっぱいになっていた。しかし龍冴はそれを察し、

そっとプロフェッサーの肩に触れた。

～第93章～ <届け物>

「そういえばこんな物が届いてますよ。」と蒼凱が縦30cm、横100cmほどの木箱が出してきた。

「ん？あぁ～。やっと届いたか。」と龍冴は言い、木箱に近づいた。

「一体何なんですか中身は？」と蒼凱が訊いた。

「これか。この日本にあってはいけない物かな。」と龍冴が言うと釘で止めてある木箱の蓋に手を掛けた。

「それってまさか！銃器か！？」

「珍しいな～。大体の銃器だったら作ってしまうのに。」と天山が驚いて訊いた。

大きな音を立てて龍冴が木箱の蓋をこじ開けながら微笑んだ。

そして木箱の中に右手を突っ込み何かを探していた。

見つけるとそれを出した。しかしその表情は急に曇った。

それを見るや全員驚いた。それは”ステアーAUG”だった。

「なんだ。偽物か……。こんな紛い物よこしやがって。」と龍冴が手にした”ステアー”を見ながら愚痴った。

「どういことなんじゃ、これは？」とプロフェッサーが訊いた。

「分かったよ、説明する。

これは凱歌が使用したとされて押収された物で、回収を命じておいたんだ。

特にライフルを探していたんだ。やっと2丁だけ見つかったが、1つはどうも偽物を掴まされたようだ。

天山、持っててみる。分かるから。」と龍冴は手にしていた”ステアー”を天山に投げた。

天山は慌てて受け取ると顔を曇らせると龍冴を見た。

「そう、このライフルはバランス、重心がおかしいんだ。その上、あちらこちらいじられている。

恐らくこれは押収品の密売の際に高く売れる様に、”ステアー”を愛用している有名スナイパー、つまり凱歌の物と騙った代物。

まっ仕方が無い。こいつはフィリピンの特に密売の名所からの物だからな。

あと一丁が問題だな……。」と龍冴は言うと再び木箱の中に手を突っ込んだ。

「なぜ海外から取り寄せた？日本にもあるだろうが？」とプロフェッサーが訊いた。

「運難コンビが日本の物は色々と面倒だからってダメだったんだ。

確かに事件が事件だけに、それと凱歌は今行方不明とされているからな。

それもあってライフルの持ち出しは危険だからな。

ん？あったぞ。これは本物みたいだな。」と龍冴は静かにライフルは取り出した。

そのライフルは先程の物とは全く違うのが素人目で分かるほどだった。

「これを作った奴はいい腕をしている。こんな奴がまだ居たとはな。」と龍冴は”ステアー”を構えながら言った。

そしてそれを凱歌に見せようとしたが、龍冴は凱歌の瞳に現れたためらいの光に気付き止めた。

「やっぱりこいつを持つのは嫌か？」

まっ当然といえば当然だが、過去に背を向ける事は出来ない。

第一、どんな武器も能力も、使う者の心次第で天使にも悪魔にもなる。

このライフルを正義の物にするも、殺人の道具にするも持ち主次第。

学問だって同じだ。それをどう使うかで、英雄になったり悪魔になったりする。

凱歌、お前に悪しき心が無ければこいつは正義の武具になる。

お前の心に悪しき心はあるか？」と龍冴は初めこそ笑顔だったが、真剣で探るような表情に変わっていた。

凱歌はその言葉に答える様に静かに龍冴が差し出した”ステアー”を手に取った。

「確かにそれは僕が使った物だと思います。」と凱歌は”ステアー”のバランスなどを確認しながら答えた。

「そうか。一つ訊きたい。これを作ったのは誰なんだ？」と龍冴は”ステアー”を凱歌から受けたり訊いた。

なぜか凱歌は答えるのをためらっていた。

それを龍冴が見るや素早く”ステアー”を解体し始めた。

あっという間に”ステアー”は見る影も無くなった。

そして、あるパーツに龍冴は目を止めルーペで調べ始めた。

「なるほど。それで答えるのをためらったのか…。」

こいつは八雲の作品か。あいつめ、どこまで世話を焼かすんだ。

しかし初代八雲の物と比べればまだまだだな。

親子揃って何やってやがるんだ。

師匠も息子にこんな事を教えるとは…。」と龍冴が呆れた様に言った。

「師匠って？」ときなこが訊いた。

「あぁ…。それはなぁ。初代八雲つまり君達が知っている八雲の父親の事だ。

八雲の家系は代々世界有数の装飾武具職人だったんだ。

しかし、時代は剣から銃器へと変わっていた。そこで銃器の製造もする様になった。

独学と独自に編み出したその技術は圧倒的なものだった。

伝統ある武具職人の技術により完璧と言っていいバランス、精度を持っていた。

俺はその技術を手に入れる為に若かれし時の初代八雲に弟子入りしたんだ。」と龍冴が答えた。

「今や初代八雲を越える腕になっていますよ。」と天山が付け加える様に言った。

「まァ、アイツにどうこう言ってもしょうがない。してしまった事に文句を言っても始まらない。

第一アイツには武具製造をする理由が無くなったんだからな。

でも、警戒は怠らない方がいいか。アイツは曲者だからな。」と言うと龍冴は誰かに連絡を取っていた。

「しかし、何の為にこれを用意したんですか？」と蒼凱は忘れていたもっとも初歩的な質問を訊いた。

連絡を終えた龍冴が”忘れていた”という顔をして口を開いた。

「説明してなかったな…。これを用意したのは、凱歌の為にライフルを作る為だ。

もちろん人を殺す為じゃない。これは凱歌の能力を活かす為だ。

その為には使い慣れたライフルが一番だ。しかし、作り主に頼むにも情報が足らなかった。

しかし、これなら復元するどころか、完璧な物を作る事が出来る。

更にこれなら実弾を使わない新しいライフルを作り出す事が出来る。

人を殺せないライフルを。まァ楽しみにしていてくれ。」と意味深な事を龍冴は言った。

そして、”ステアー”を素早く元に戻し木箱に仕舞い、封筒を取り出した。

「こいつは”情報”の部門と”変身”の部門そして俺の部門それぞれにある事調査を依頼しておいた。

その調査の結果だ。とんでもない結果が出てきた。二人とも見るといい。」と龍冴は言った。

凱歌ときなこはその封筒を開け中身を見た。

そこには死亡診断書などが複数出てきた。但しそれはおかしい事ばかりだった。

全て同一人物の物だった。それは1211のボス・コー村木の物だった。
「君達の話などから調査をしたんだが、この男は謎と言うかおかしな点が多すぎる。
我々の簡易調査だけで5回は死んでいる。しかもちゃんと火葬までされている。
DNA検査も同一人物と出ている。分からない事だらけだ……。しかし可能性は一つだけある。
信じたくないがな。この世界で最先端技術を使えば不可能ではない。
俺という者が存在するのだから不可能ではない。」と龍牙は言った。
全員がその調査結果に固まってしまった。

龍牙は気を取り直し話し始めた。
「さて、この事をここで考えても始まらない。今日からまた鍛錬の続きだ。
但しこれまでは基本。こっからは応用に入る。
今日から俺が鍛錬相手になる。しかし俺も同時に二人を相手には出来ない。
そこでまず今日は凱歌の方に付く。明日はきなこさんだ。
そして天山。お前は俺と一緒に凱歌に付いてもらう。
プロフェッサーはきなこさんに付く事。
蒼凱も凱歌の方に付いてくれ。」と龍牙が指示を出すと、天山達三人は頷いた。
その顔はやや引きつっていた。
「しかしこの組み合わせは……。」と天山が心配そうに言った。
「ん？見れば分かるだろう。
戦闘用鍛錬と支援用鍛錬の違いだ。
凱歌に戦闘のスペシャリストになってもらう。
きなこさんには支援技術を身に付けてもらう。
もちろん凱歌にも後で支援技術の鍛錬はする。
しかしやはり実戦経験が多い方が教える事が少なくて済むし、戦闘時安心出来る。
それにそれぞれのタイプもあるしな。」と龍牙は説明した。
「でもそれなら僕はきなこさんの方じゃないんですか？」と蒼凱が言った。
「何言ってるんだ？お前がいつ支援役になった？
悪いが今までずっとお前は戦闘員以外の何者でもないぞ。
それに武器戦のみなら天山より強いかもしれないんだぞ。
少々優しすぎるのが玉に瑕だけどな。あっ！それと凱歌ときなこさんの正式な武器はこの
第二弾鍛錬が終了したら渡すから楽しみにするといい。
渡す前にちょっとしたイベントがあるけどね。」と龍牙が楽しそうに言う。「朝食、朝食。」と
口ずさみながら部屋を出ていった。
全員が「暢気だな〜。」と呆れそうになったが、それが心配させない為の行為だと気が付いた。

朝食を終えると龍牙はゆっくりとお茶をすすりながら、今日の鍛錬内容を頭の中で整理していた。
食後の休憩を終えるときなことプロフェッサーを残し、龍牙達は凱歌を連れて先に食堂を出ていった。

~ 第94章 ~ <裏切りの代償>

- 武道場2 -

龍冴は凱歌達を連れ、室内へと入っていた。

全員自分専用の練習用武器を持っていた。

しかし龍冴だけは何も持っていなかった。

「これから徹底的に戦闘術をこの短時間で身に付けてもらう。

もちろん殲滅作戦時は君達の安全を最優先にはするが、手が回らなくなる可能性がある。

そうなったときなこさんを、何より自分の身を守るのは凱歌、お前自身だ。

「どんな事が待っていようとそれを乗り越えていけ。」と龍冴は言うのとポケットから何かを取り出した。

それは全長20 cm ほどで刀身10 cm ほどの短剣だった。

静かに鞘を外すとその刀身が本物である事を示す輝きがあった。

「そう、その短剣は見ての通り本物だ。

これから俺と組み手をしてもらう。一撃でも俺に当てればお前の勝ちだ。

武器は使ってもいい。そしてこの短剣はこうする。」と龍冴はその短剣を口に加えて見せた。

「簡単なハンデだ。本気で来なければお前が怪我をするだけだ。

技は学ぶものではない。盗むものだ。」と龍冴が言い切る。

その時龍冴の目が鋭くなった。そして手にしていた短剣を右側の壁に向かって素早く投げた。

短剣は金属同士がぶつかるような音を立て壁に刺さった。

しかしその時凱歌の目の前に蒼凱が立ちはだかった。

それはまるで凱歌を守る様だった。

そして手にしていた槍で何かを弾いた。凱歌が床を見るとそこには小型の投剣が数本落ちていた。

「すみませんね。僕達の組織もそんなに団結してないもんで…。

お金に目が眩む不屈者が居ましてね。」と蒼凱が振り返らずに凱歌に言った。

その時、何が叩きつけられるような音が響いた。

「四天王の三人が集まるこの場に侵入するだけに懲りず暗殺を企てるとはいいい度胸じゃねえか！！

少々俺達を舐めている様だな。」と龍冴は怒鳴り首を捕まれ壁に叩き付けられていた男を凱歌達の

そばに投げ飛ばした。

男がゆっくりと起き上がるとその首元に蒼凱の槍先と天山の剣の剣先が突き付けられた。

そして怒りに満ち満ちている事がありありと分かる龍冴がゆっくりと戦斧を両手に歩いてきた。

それはまさに鬼の形相いや鬼そのものだった。

「流石は元殺し屋。そして変身の部門の一員だ。

侵入、姿、気配消しはなかなかの物だ。しかしながらそれでは我々は騙せない。

その程度の技量では寝ていても不可能だ。

分かっているな。この組織に入った時に交わした契約の事は。

契約を守れない者には当然罰が下る。それはとても重い。

何を失いたい？四肢か？それとも五感か？

前に話したよなあ～。俺がこの世でもっとも許せない事が4つある。

1つ目が命を遊ぶ行為そして殺した。

2つ目が約束を破る。

3つ目が騙す。これは嘘とは違い悪意を持って騙す事だ。

そしてこれが一番許せない事だ。裏切りだ。

お前にもこの4つは人として当然守るべきものである事ぐらいは分かるな？

さてお前は4つの内いくつ引っかかったか？答える！！」といつに無く恐ろしい声と殺気で龍冴は言った。男は恐怖のあまり喋れずに居た。

「喋れないか？

それじゃ俺が教えてやる。

お前は4つ全てに引っかかった。

それがどういう事を指しているか分かるな。

契約には今までのお前の罪を免除にする代わりに世界平和の為に死力を就くと無かったか？お前は単独でこんな馬鹿げた事をしたのか、それとも命じられたか教えてもらうか？」と龍冴は見下す様に男を見ると手にしていた戦斧を男の左足ギリギリの所に投げ付けた。

それに動じた男は口を開いた。

「私は…。確かに賞金に目が眩みましたが思い止まりました。

ですがあの方に命じられて仕方が無く…。どうかお許しを龍冴様。」と男は龍冴を恐る恐る見ながら懇願した。

「じゃあ聞かせてもらうか？まず凱歌に賭けられた賞金とやらを。そして命令した奴の名を。」と龍冴は怒りを露にしつつも冷静に訊いた。

少々ためらい気味に男は話し始めた。

「凱歌に賭けられた賞金は今も上がり続けています。

私が知っているだけで今は一億円近いと思います。そして私に命令したのは”ドレイク大佐”です。あの私はどうなるのでしょうか！」と男は必死に言った。

しかし龍冴は最後の言葉を聞いていなかった。その前に出てきた男の名に怒りを感じていた。

龍冴はその更に高まってしまった怒りを拳に込め、壁に叩き付けた。

「たかが一億程度で命を賭けるのか！？」

”ドレイク”と言ったな。あの軍上がりの戦闘マニアが勝手な事しやがって！」と龍冴は怒鳴った。それを天山は見た後、視線を再び男に戻した。

「君の処分だが通常、上官の命令無く勝手な行動を起こした。

更にその行為がしてはいけない行為…。よく言うが”裏切り者には死を”と。

この言葉の通り、人が行う行為の中でもっともしてはいけない事は信頼する者の信頼を裏切る事だ。

聞かずとも答えは自ずと出てくるだろう。君は免除されていた刑罰を執行される。私の手で。

君は死刑に相当する罪を犯した。しかしながら死刑制度が廃止されていた為に終身刑に処させる事になっていた。しかしこの国は死刑制度が存在する。

それが何を指すか分かっているな。だがここで選ぶ権利を与えよう。

自ら命を絶つか、私に死刑を執行されたいか。」と天山は妙に冷静に言った。

その声に凱歌は初めて天山が恐ろしくなった。

いくら刑の執行とはいえ、人を殺すのである。それを無表情、無感情に行おうとしているのである。ここに居る者は数々の修羅場を潜っているとは思っていたが、ここまで死に麻痺しているとは思わなかった。

男はどちらも選べる訳も無く固まっていると天山は首に突き付けていた剣を鞘に収めた。

「選ばないのなら私が痛み、苦しみ無く死刑を執行してあげましょう。

これも情けですよ。でなければ、通常通り苦しい絞首刑ですからね。」と天山は言うのと左手を鞘に、右手を柄に掛け体制を低くした。

その体制は居合い抜き構えだった。

天山の技術を持ってすれば、例え刃が付いていなくとも致命傷の傷を与える事が出来る。

蒼凱はゆっくりと男から離れた。そして凱歌を男から離す様に動き、立ちはだかる様に立った。

そして天山はしゃがみ込む男を見つめ、その刃をその首に向けた。

男は逃げる事無くその場にとどまり顔を閉じた。

しかし、一向に刃が男の命を奪う事は無かった。

静かに顔を開くとそこには天山の剣を押さえる龍冴の戦斧が光っていた。

「いい覚悟だ。自らの罪を認め、その処分を受ける決心。それに免じて、処分を軽減しよう。

第一、天山。お前も俺に止めてもらうと待ってんじゃねえよ。」と龍冴が天山の剣を弾き飛ばしながら言った。

「ばれてましたか…。しかしながらいい覚悟です。普通なら逃げているもおかしくないのに、逃げず処分を受けようとした。これは更正の可能性ありと判断出来ますからね。

でも、処分が無くなった訳ではありません。

処分は龍冴、貴方が決めて下さい。

凱歌は貴方の管理下ですから。それに関する事は私より貴方に決定権があります。」と天山はいつもの感じに戻っていた。

二人は阿吽の呼吸というか、長年の仲で打ち合せなくこんな事をしたのである。

互いを理解し、信頼していないと出来ない事である。

そしてそれを蒼凱も分かっていたので止めなかったのである。

「驚かせてしまってすいませんね。

でも二人も色々な事をしてきましたがやっぱり死刑の執行というのは嫌なんですよ。

僕だって嫌です。いくら”即時執行権”という権利があったとしても…。

いつさっきまで動いていた者を部下だった者を殺すなんて。

ここに居る大半は死刑に相当する罪を犯しています。

だから免除の取り消しは死に繋がる。

でもそれをしない為に更正の可能性があるので試すんです。」と凱歌に蒼凱は説明した。

「それじゃあ処分を言い渡す。刑罰の執行まではいかないもののその罪状は重い。

それによりお前には”ヘルゲート”行きを命ずる。以上。」と龍冴は言った。

その言葉に男は動揺した。

「そんな”ヘルゲート”ですか！？それだけは！あそこに行くぐらいなら死んだ方がマシです！」と男が龍冴の足にへばり付いた。

「あのな～。死んだらそこから何も進まなくなるんだぞ。

それに死ぬ訳じゃない。一時苦しむだけで済むんだからいいじゃないか。

天山、連れて行ってくれ。」と言う龍冴の目は男の言葉に納得しているような感じだった。

天山は剣を鞘に収め、力の抜けた男の体を立たせ連れて行った。

「一体”ヘルゲート”って何なんですか？」と凱歌は訊いた。

「ん？あぁ、”ヘルゲート”って言うのはね。

言葉通り地獄への門なんだと言っても、本当の地獄ではなくこの組織の規則に背いた者に罰を与える為の施設なんです。

そこには大きく分けて5つの罰があります。

しかし地獄に例えられるだけだって辛いと言うのでは言い表せないそうです。」と蒼凱が説明をしていると龍冴が話に入ってきた。

「本当に地獄だよ、あそこは…。」

あの男の言った通り下手をすると死んだ方がマシかもしれないと思える。

5つの罰と言うのは、この組織の5つの部門に由来している。

その罰の重さ、身体的状態によって変わる。

アイツなら命令で行った事で更正の可能性ありと判断したから、多分軽い変身の部門の罰になると思う。

しかし、これが重いと判断されると生と研究の部門の罰になると新薬の人体実験台になるからな～。

俺もプロフェッサーに騙させて、”ヘルゲート”の門をくぐったからな。

俺でさえ、耐えられないと思ったからな…。身体的にはいいが精神的に勘弁して欲しい。」と龍冴が思い出して身震いしていた。

その姿に凱歌と蒼凱は”ヘルゲート”の恐怖を十分過ぎる程理解した。

それから10分ほどして天山が戻ってきた。

天山によるとあの男は龍冴の予想通り変身の部門の罰つまり変身用具の体験者をする事になったそうだ。

しかしこれも新薬の実験も含まれているので身体的にはキツイらしい。

そしてこれまでも何度と無く凱歌の命を狙って動いていた者が居た事を龍冴は教えてくれた。

蒼凱にはいつも警備を頼んでいた事も。

これまでに3名ほどが命令され仕方が無くしていた事が判明した。

彼らは全て”ヘルゲート”行きになっていた。

そして今回までは隠していたが隠さず公開する事にした。

それは特別令と共に出しているのもうこのような事はないと龍冴がやや強い口調で言う。

～第95章～ < 試練 >

邪魔者が入り中断してしまった凱歌の鍛錬を気を取り直し始める事にした。

龍冴は短剣を口に加えるのをやめ、素手対武器というシンプルなハンデ戦をする事にした。

但しそこには龍冴の手加減が無いという点がある。

その為、蒼凱と天山がいざとなった時の為にスタンバイしている。

これはまさに龍冴の技を素早く盗み、身に付けなければ命の保証が無いという恐ろしいが手っ取り早い究極の鍛錬である。そして龍冴と凱歌が向き合った。

龍冴は構える事無く悠然と腕組みをしていた。

その視線は凱歌を突き刺す様に鋭く冷たい。そしてまさに見下す様だった。

凱歌はその視線が自分を本気にさせる為のものである事に気付いていたが、そのあまりにも痛い視線に息を飲んだ。

そして静かに練習用の読春刀を腰の鞘から抜き、構えた。

「言い忘れたがこれは鍛錬と言うよりも試練と言っていい。

これを乗り越えられない様ならば作戦中、足手まといにしかならないと心しておけ。」といつに無く冷淡に龍冴は言った。

そして静かに左手を凱歌に向け、人差し指と中指の二本で手招きをした。

そのやり方はされた相手の心を逆撫でにする様だった。

凱歌はその挑発には乗らず冷静に龍冴の隙を窺っていたが、全く隙を見せない。

それどころか龍冴に気配に気押されしていた。

圧倒的な存在感が龍冴の経験の多さ、深さを物語っていた。

凱歌は隙が出来るのを待っていては埒があかない事を痛感し、先手必勝と攻撃に出る事にした。

意を決めた凱歌は、龍冴に真正面から向かっていた。

龍冴は動じる事無く腕組みをしたまま立っていた。

その瞬間、凱歌は龍冴の目の前から消えた。

次の瞬間には後ろに回り、左手を詠春刀を振るった。

しかし、凱歌が行った様に龍冴も凱歌の視界から消えた。

凱歌が右手の詠春刀を後ろに振るったが左同様に空を切り裂いた。

次の瞬間、凱歌の左肩に強い衝撃が走った。

左肩に龍冴が腕組みをしたまま片足立ちをしていた。

「確かに素早くいい動きだ。

大抵の相手なら今の無鉄砲に見える真正面からの攻撃から高速移動による背後攻撃。

上手いが、それを相手からされて引かかかってどうする。

俺は経験で確かに君の動きを知っていたが、君の動きがここまで速いとは思わなかった。

でも、避けて更に君の肩に立っている。それはどうしてかな？

これは反射神経とか身体能力を違いではない。

まずそこから身に付けないといけないな〜。」と龍冴は言うど5 m ほど後ろに飛び退けた。

再び来る様に手招きをした。その表情は遊ぶ鼠を見つけた子猫の様だった。

その龍冴の言葉の真意を凱歌は理解出来ていなかったが、打って出るしかなかった。

再び凱歌は龍冴に向かっていた。

それを蒼凱と天山は静かに見ている。

龍冴は今度、ただ避けられるだけでなく攻撃を加えてきた。

それはただの打撃攻撃ではなく気功術による攻撃だった。

そして何度となく向かっていく凱歌を龍冴は容赦なく吹き飛ばしていた。

凱歌が苦痛に起き上がるのに手間取っていると龍冴が向かって来た。

咄嗟に蒼凱が間合いに入ってきた。

「気を使えない僕が説明するのも何か変ですが、龍冴が今貴方に身に付けて欲しいと思っているのは”心眼”です。心の眼です。それは気を扱う者なら誰しもが手にする事が出来る能力です。

僕は”心眼”を知らぬ間に身に付けていたのでどうしたら身に付けられるかを教えられませんが、”心眼”は”気流”を感じ、見る事が出来る能力です。

今、僕の眼には龍冴さんから発せられる”気流”が見えてます。それによってある程度気功術を避けられるんです。

気配を読むのではなく、いかなる人間も放っている気を、周囲に流れる気を見るんです。」と蒼凱が言うど向かってくる龍冴に槍を向けた。

龍冴は蒼凱の登場に気にせずに向かってきた。その目には敵を見る様に冷たかった。

蒼凱はその冷たい眼差しに恐怖を感じ、冷汗を掻いた。

そして振り返り凱歌を見ると、『時間を稼ぎます。』と言うような眼差しを向けると、龍冴に向かっていた。

激しい蒼凱の突きを最小限の動きで避けていた。

その間に天山は凱歌を起こすと、凱歌にアドバイスをした。

「と言っても”心眼”を習得するのは簡単な事では無い。

でも、無ければ気を扱う者としては困るんです。

気の流れ、”気流”を把握する事で、外気を素早く集める事が出来る。

そして敵の動き、手を見る事が出来る。

特に相手が気功術士ならなおさらです。

開眼のポイントは、”気流”を感じるのではなく見るのです。

目を凝らし龍冴の周囲を見るのです。きっと龍冴の周囲に渦巻く”気流”が見えるはずですよ。

”気流”というよりもあれは業火と言っている…。」と龍冴が見ながら天山は言った。

凱歌は天山に言った事が何となく分かった気がした。

何故なら確かに薄っすらだったが龍冴の周囲に流れのような物見えた。

しかし、それは見えなくなったりと不安定だった。

『目を凝らす』。凱歌は目を閉じ集中した。そして意識を見る事だけに意思を思っていた。

ゆっくりと凱歌は目を開け、感じるのではなく見ようとした。

そこには見たこともない光景が広がっていた。

龍冴の周囲には確かに天山が言う様に流れではなく燃え盛る炎が見えた。

蒼凱はその襲い来る炎を避ける方に戦っていた。

その炎は龍冴の次の動きを指している様に見えた。

しかし、龍冴は蒼凱の周囲の”気流”を見て攻撃する以上避けられる事は知っているのだから次の手がすぐに出る。

その戦いの中で気が集まり渦を成している所があった。

”気流”と”気流”がぶつかり合い、大きな渦に成る所が。

龍冴は冷静にその位置を把握し、その気を使い気功術を繰り出していた。

その為、自らの気をほとんど消費していないのである。

これならば確かにただ周囲に気を集めるより効率が良く、一瞬で大技が出せる。

「凄い…。」と凱歌が呟いた。

「どうやら見える様になった様ですね。

本当はこんなに簡単には開眼しませんよ。

凱歌、貴方が特別なんです。”心眼”について言えば蒼凱の方がもっと特別ですがね。

彼は気を使えないのに、”心眼”を幼い時から使えた才能のある子供でした。

そのお陰で命拾いした事が何度もある様ですけどね。

さあ、龍冴に一撃与えてこの試練を乗り越えましょう。

そろそろ蒼凱も限界でしょうからね。

彼は非常に高性能な”心眼”を持ってはいますが、良すぎる能力は身を滅ぼします。

彼のは特別精巧で異常に精神力を使うので長時間使えないんです。

貴方のはそんなに精神力を使わなそうですね。

まあ、これからの訓練次第でいくらでも能力は上がりますがね。」と言うと天山はそっと凱歌の背を押した。

凱歌は龍冴の気を見ながらゆっくりと歩み寄っていった。

それに蒼凱が気が付いた瞬間、龍冴に気功弾を撃ち込まれ吹き飛ばされた。

幸い、槍で防いだが衝撃を押さえ切れなかった。

「どうやら”心眼”を会得した様だな。

しかしそれだけでは俺に一撃与える事は出来ないぞ。」と変わらず敵を見るような冷血な眼差しで龍冴は言った。

凱歌と龍冴は終始睨み合った。まるで何かを待っている様に。

何も知らずこの二人を見ている者には何をなっているかさっぱり分からないが、蒼凱と天山には何を待っているか分かった。

それは先程の蒼凱との戦いで乱れた”気流”が安定するのを待っていたのである。

そして室内の”気流”が治まり、静寂が室内を支配した。

静寂を切り裂く様に凱歌の詠春刀の風を切る音が響いた。

その刃は黄色く輝き、閃光を放った。

龍冴はそれを避ける事無く、左手で掴んだ。そして自らの周囲にある炎で包んだ。

そしてそれを凱歌に投げ返した。

それから二人のぶつかり合いは更に激しくなった。

それから途中休憩が入ったが、5時間以上が経過した。

凱歌は回避しつつ今度は複数の気功刃を放った。

龍冴もそれに対して気功弾を撃ち出し、応戦した。

その時、龍冴の背後に凱歌は回り、空中蹴りを仕掛けた。

しかし龍冴が気付かぬ訳も無く、後ろ蹴りをされた。しかしそこには誰も居らず、詠春刀が飛んで来ただけだった。

龍冴が凱歌の真の攻撃に気付くのに遅れた。

『しまった。』と思った時に目の前に凱歌の詠春刀が向かっていた。

咄嗟に使うつもりが無かった気の変換を行い、寸分の所で回避した。

これには龍冴も蒼凱達も驚いた。

ここまで凱歌の腕が上がっているとは思わなかった。

龍冴が何故投げられた刀を凱歌と間違えたかという、凱歌は目一杯の気を詠春刀に込めていた。ただ込めたのではなく込めた気に形を付けたのである。

それはとても高度で咄嗟に出来る物ではない。

その為、龍冴は油断し、見誤ったのである。

龍冴は凱歌に本気で拳を繰り出してしまった。

その速度に避けられず、凱歌は詠春刀を刃先と柄の二点で持ち防ごうとした。

しかし龍冴の拳は詠春刀をガラスが割れる様に粉々に破壊され、凱歌を吹き飛ばした。

蒼凱と天山は吹き飛ばされた凱歌を捕まえた。

二人が止めていなければ確実に10 m 以上は飛ばされ、壁に叩き付けられていた。

龍冴はハッとしてすぐに凱歌の元に駆け寄った。

「すまん！！まさか、あんな高度な術を使うとは思わなくて咄嗟に加減を忘れて・・・。」と龍冴は本気で謝っていた。

それ以前に凱歌はその龍冴の力に驚いていた。

「あんなものを本気で食らっていたら死んでいる。」と凱歌は思った。
ただ、「加減を忘れた」と言っているものの体に当たる直前に当たらない様に調整したのを感じていた。
いかに龍冴が常に力を加減しているかを痛感した。
龍冴の本気がいかなるものか想像が付かなかった。
詠春刀の大きな砕ける音に、プロフェッサー達が駆け付けて来た。
二人に支えられる凱歌にきなこが心配そうに駆け寄った。
そしてプロフェッサーは現場を見るや状況を把握し、凱歌の腹部に手を当てた。
「なるほど龍冴が加減を忘れたと言った所か…。しかし凱歌、許してやってくれ。
龍冴は常に力を押さえているから、何かの拍子に押さえてた力が出てしまうんじゃない。
それに恐らく凱歌、龍冴に危機感を感じさせたな？」
咄嗟に急所を狙うのは、暗殺者時代の名残と言っていい物だ。
でなければここまで正確に急所を狙わん。
まゝ気が付いて途中でずらした様だが。」と言うとプロフェッサーは龍冴を睨んだ。
龍冴はビクッと固まってしまった。
「しかし、鍛錬中に龍冴に危機感を与えて加減を忘れさせたのは、4人だけだ。
しかもどれも今や強者ばかり…。
ここに2人と居るが、あとの2人は現在龍冴の右腕、左腕的存在じゃからな。
やはりお前さん是对した奴じゃよ。」とプロフェッサーは笑った。
「笑い事じゃないですよ！
もし龍冴が途中で押さえたからいいものの本当に入っていたら即死ですよ！」と蒼凱が言った。
「確かにそれに私達が止めていなければ、大怪我でしたよ。」と天山も蒼凱に賛同し言った。
そんな中、龍冴はとても小さくなっていった。
「本当にすまなかった！！」と龍冴は土下座していた。
そんな光景に逆に凱歌が悪い気がしてきた。
「いいんですよ。鍛錬だったんですから。」と凱歌が言う。
「そう言う訳にはいかない。いかなる時も自らの力を理解してなくてはならないんだ。」と龍冴が頭を上げなかった。
「そういえば二人に龍冴の力をちゃんと見せて無かったんじゃないか？」とプロフェッサーが言った。
「確かに説明しておいて方がいいかもしれませんね。」と天山が言うと凹む龍冴を立たせた。
龍冴は周囲の顔を見渡し、溜息を吐いた。
「やってもいいけど…。これやると絶対俺を見る目が変わるからな～。」と嫌々な声を龍冴は上げた。
そして、落ちていた壊れていない詠春刀を右手に持った。
その刀身をゆっくりと左の小指を押し当てた。すると詠春刀に穴が開いてしまった。
一点に正確な強力な力が掛かった事で、砕けるのではなく穴が開いたのである。
「これで分かると思うが、俺の身体能力は異常というか、おかしいんだ。
俺が本気で殴るとコンクリート壁だと5 mの厚みの物でも簡単に壊せる。
つまり人間の体だったら、デコピンで吹っ飛ばせる。小突くだけでバラバラだ…。
まゝ、本気で握手しようものならぐちゃぐちゃになる…。
ジャンプ力でも軽く飛んで4階ぐらいまでは行く。全力で飛んだらどうなるかはした事がない。
とまゝ加減しないで生活したら辺り皆、粉々だ…。

通常生活では1%未満の力で生活してる。じゃないと生活出来ない。

天山とやる時だってせいぜい出しても10%~15%ぐらいだ。ありすぎる力は身を滅ぼす。

ほら！二人とも絶句してるじゃないか！」と龍冴は凱歌ときなこを見ながら言った。

二人は無意識に龍冴を見る目が変わっていた。

当然だが怪物を、恐ろしいものを見るような目に……。

龍冴はショックだったのかますます落ち込んで背を向けてしまった。

二人は慌てて龍冴に言葉を掛けようとしたが、三人が止めた。

「言っても無駄です。

二人がそういう人間じゃない事ぐらい龍冴だって分かってますよ。

だから、これからも普通に接してあげられればいいですよ。

ただちょっと落ち込んでいるだけです。

自分が人間じゃないという事実に自分が一番ショックを受けているんです。

そんな事、誰も気にしてないのに自分が一番気にしてるです。」と蒼凱が笑顔で言った。

二人はその言葉に龍冴を一瞬哀れんでしまった。

しかしすぐにその思いを振り払った。

その思いこそ一番龍冴が持たれたくない思いだったからだ。

しばらくするとそのまま龍冴は立ち尽していたと、突然振り返った。

「腹減った。昼食抜いちゃったからな！夕食だ！」と龍冴は突然大声で叫び部屋を出てしまった。

全員がビックリして固まってしまった。

「全く！人の気も知れないで何を言い出すかと思えば！まあ元気になったという事か。」と

天山が呆れた感じで言った。

そして全員が笑い始めた。おかしかったのと同時に嬉しかったのかもしれない。

自分を信頼してくれたから自分が一番知られたくない事を教えてくれた事に……。

そんな時蒼凱がそっと部屋の外に出た。

そこには引き攣った表情の龍冴が居た。

「無理をしましたね。いくら分かっていてもあの眼差だけは辛いですからね。」と蒼凱が言った。

「それもあるが、まだあいつらには秘密があるのが辛くてな……。」と龍冴は言った。

「仕方ありません。それは二人も分かってくれるはずですよ。」

龍冴さんは僕達とは違いますし、僕だって二人に話してない事があります。

それに何を知ったとしても二人なら大丈夫ですよ。」と蒼凱が言えると同時に扉が開き中から他の4人が出てきた。全員きょとんとしていた。

龍冴が「行くぞ！」といつもの明るい感じで声を掛け進み始めた。

途中で蒼凱は天山から何を話したか聞かれたが曖昧にした。

蒼凱は何故だか分からないが「苦悩する龍冴を自分以外には知られたくない」という思いがあった。

それは変かもしれないが、彼にとっては目標である龍冴の違う、完璧でない一面を自分の中だけに仕舞っておきたかったのかもしれない。

天山はその曖昧な蒼凱の答えに疑問を感じたが、長年の付き合いから何となく分かったのでそれ以上聞かなかった。

凱歌ときなこの二人は龍冴の脅威的な力に驚いたものの、それを相手に合わせて制限する辛さを

想像していた。

そして龍冴の能力と精神力に目を見張った。

怒ろうと何があろうと、いかなる時どこかで冷静な自分がある事になるのである。

それは並大抵の事では出来ない。怒りは理性を失わせ、持てる力を解放してしまうものである。

改めて龍冴がただの陽気な男ではなく、しっかりと周囲を見、自分を知る者である事を知った。

一方一番後ろからプロフェッサーはきなここと話す凱歌を見ていた。

その視線はいつに無く真剣でいとおしい感じもあった。

そして彼はボソッと「磨利亜(マリア)よ。お前はとんでもないもんを残したな・・・。」と。

そんな意味深な言葉は彼の隣に立っていても聞き取れないような小さな声だった。

そんな色々な思いが交錯する中で1日が終わりを迎えていた。

しかし、龍冴だけはのんびりとしていられなかった。

鍛錬で壊した凱歌の詠春刀を用意し、明日の準備を終えると朝向かった個人施設の中に消えていった。

その夜、その扉の向こうより、わずかに開いた隙間から一晩中漏れる音が聞こえていた・・・。

- 続く

～あとがき～

今回は1ヶ月弱という長い時間を掛け、長々と書かせて頂きました。

今回最後の方で新しい名前が現れましたが一体何者なのか・・・。

それはこれからラストに向かって重要な(断言はしませんが)役所です。お楽しみに。

前作から今回までに色々な事がありました。

劇場版の上映が終わって未だに余韻、中毒にかかっていたり、サントラの発売未定の理由に憤慨したり、更に最近ではDVDの話も出てきて嬉しい事、悲しい事などがありました。

私にも個人的にこのあとがきを書く直前に、嬉しい連絡がありました。

その連絡によって新しい生活を迎える事になり、この作品を時間が今でより少なくなってしまうとは思いますが、必ず完成させますので楽しみに次を待って頂けると幸いです。

次の内容は大体決まってはいるものの書き始めると横道にそれるのが私のダメな所で・・・。

書き始めた当初の予定より遥かに長くなっているこの作品です(予定の2倍ぐらいかかってます・・・)が最後は素晴らしい物にしたいと思っていますので。(今回のストーリーも大半が初めは無かったものから、これでは横道ではなくなってます・・・。)

皆さんの感想を読ませて頂いて、参考にさせて頂いています。どんどん言って頂きたいです！

時間が許す限り、この作品に割きたいと思っていますが、また1ヶ月後とかになっちゃうかもしれませんがよろしく願います。